

ICT を活用したプロジェクト型・課題解決型英語教育

桑原 里美^{*1}・梅本 陽翼^{*2}・山信 和也^{*2}・後藤 大雄^{*3}
高橋 俊章^{*4}・松谷 緑^{*4}・藤本 幸伸^{*4}・猫田 和明^{*4}

Using ICT to Support Project- and Problem-Based English Language Learning

KUWAHARA Satomi^{*1}, UMEMOTO Yosuke^{*2}, YAMASHINA Kazuya^{*2}, GOTO Daiyu^{*3},
TAKAHASHI Toshiaki^{*4}, MATSUTANI Midori^{*4}, FUJIMOTO Yukinobu^{*4}, NEKODA Kazuaki^{*4}

(Received May 31, 2022)

キーワード：ICT、Project-Based、Problem-Based

はじめに

21 世紀においては、これまで遭遇したことのない未知の問題に対応する能力を備えた、急速に変化する社会に適用できる人材を育成することが必要となる。具体的に言えば、ICT リテラシー、問題解決能力、批判的思考、(児童・生徒の) 主導性、創造性、協力能力、コミュニケーションといった資質・能力が今後の社会に必要とされる能力として挙げられている。しかしながら、現在までのところ、学習者に与えられる課題は、教師から与えられたものが多いのが現状である。21 世紀人材の育成では、自立的で創造的な学習者を育てていく必要があるため、課題解決型学習・プロジェクト型学習のように、児童・生徒が主体的に課題に取り組み、その課題解決のために、何が必要かを考えたり、情報や考えを整理したり、グループやクラス全体で思考を深めたりする実践についても検討が必要だと考えられる。そして、そのような資質・能力を育てるために ICT をどのように活用して行けば良いのかについて検討することが必要だと考えられる。本プロジェクトはそのような目的の下、附属山口小、および、附属山口中の 1～3 年生において実践を行い、どのようにして ICT を活用して、21 世紀人材に必要とされるような能力を育成することができるかについて考察を行っている。

1. プロジェクトの目的・方法

1-1 プロジェクトの目的

プロジェクトの目的は、ICT を活用し、外国語(英語)の授業を通して 21 世紀人材として必要とされる能力をどのように育てていくことができるかを実践を通して明らかにすることである。

21 世紀人材として必要とされる能力の例は以下の通りである。

世界経済フォーラム (<https://widgets.weforum.org/nve-2015/chapter1.html>) によれば、21 世紀型人材育成に必要なものとして、①基礎技術 (foundational skills) (ICT リテラシー、など)、②能力的資質 (competencies) (批判的思考 / 問題解決能力、創造性、コミュニケーション能力、協力能力)、③創造性、主導性などの人格的資質 (character qualities) や問題解決能力、クリティカルシンキング (異なる考えの利点と欠点を論理的に判断) などが必要な資質として挙げられている。

同様に、ATC21s (Assessment and Teaching in 21st Century Skills) (<https://resources.ats2020.eu/resource-details/LITR/ATC21s>) という国際団体が、21 世紀型人材育成に必要な資質として提唱している能力にも、①思考の方法 (創造性とイノベーション、クリティカルシンキング (批判的思考)・問題解決・

*1 宇部市立黒石中学校 (前 山口大学教育学部附属山口中学校) *2 山口大学教育学部附属山口中学校
*3 山口大学教育学部附属山口小学校 *4 山口大学教育学部英語教育選修

意思決定、学び方の学習・メタ認知（認知プロセスについての知識）、②仕事の方法（コミュニケーション、コラボレーション）、③仕事のツール（情報リテラシー、ICTリテラシー）、などが挙げられている。

いずれの場合も、ICTリテラシー、問題解決能力、批判的思考、（児童・生徒の）主導性、創造性、協働能力、コミュニケーションといった資質・能力が共通として挙げられている。

本研究では、これまで数年にわたって築いて来た学部・附属の共同研究の協力関係を活用し、上記に述べた資質・能力をもった人材を育成するための具体的な方法について検討・提案することを目的としている。

1-2 プロジェクトの方法

問題解決能力を身に付けさせるためには、課題が必要となる。そして、児童・生徒の「主体」「主導性」を育てるためには、児童・生徒自らが課題を見つけ（「課題発見」、問題解決方法を発見すること（「課題解決」）が必要である。従来型の授業のように、教師が生徒に問題解決方法を示すのではなく、児童・生徒が主体的に課題（タスク）に取り組み、問題解決を図る場面や状況が必要となる。その際、主体的に取り組むためには、児童・生徒が自ら取り組んでみたくなるような場面や状況の設定や課題（タスク）の設定をすることが不可欠となる。そして、必要に応じて、他の児童・生徒と協力して課題に取り組んだり、問題解決のために、調査（情報・データ収集）を行ったりすることが必要となる。

情報を収集・整理したり、グループやクラス全体で思考を深めたり、他の人と意見を交換・共有したりするときに、21世紀人材に必要な資質・能力の1つとなっているICTスキルを活用することも重要であり、授業の中で、どのようにしてICTスキルを活用することができるかについて検討を行った。

2. プロジェクトの実際とその成果

2-1 小学校での実践とその成果

(1) 言語材料の提示について

昨年度と同様、開隆堂 Junior Sunshine 5 Unit 9 I love my town. の単元導入時に、山口市国際交流課の方から山口市をパンブローナ市に紹介する動画を作成してほしいと子どもたちに課題を投げかけていただいた。その際、図1のように、教師の山口市紹介の例（Teacher's Talk）をGoogle Classroomを用いて共有する支援を行った。

この支援には次の2つのよさがある。①iPadを操作することで、子どもたちが自分の意志のもとで動画を視聴し、主体的に英語による山口市の紹介を聞くことができること、②山口市を紹介するための言語材料に繰り返し触れることができるので教師の意図した言語材料を効率的に習得させることができることである。実際、子どもたちは、山口市の中から、自分が選んだおすすめの場所のよさを紹介するために、You can ～. の言語材料を用いることができた。

(2) Google 翻訳を使って

単元が進んでいくにつれて、子どもたちは自主的に教師の例をもとに山口市の紹介を考え始めた。iPadが使えることで、子どもは自分の紹介に必要な語をインターネットで検索することができる。Googleの検索フォームに、日本語を打ち込むと、Googleの翻訳フォームに翻訳された英語が出てくるのである。子どもたちは、すぐに語だけではなく文を打ち込むようになった。WikipediaやWebサイトの文をそのままGoogle翻訳フォームにコピー&ペーストし、自動翻訳された英語の音声を覚えるといった子どもも出はじめた。このような学習活動は小学校外国語教育が掲げている資質・能力の育成に適ったものではない。知識・

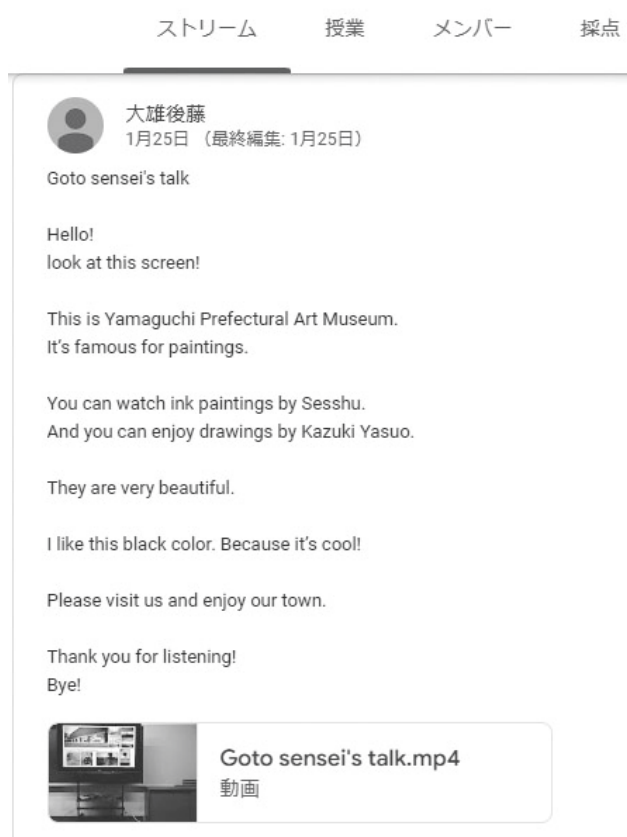


図1 Google classroomによるTeacher's Talkの共有

技能における語彙、文構造の体得につながらないからである。そこで、この Google 翻訳機能を逆手にとった授業を構想、実践した。次に具体を示す。

授業の導入で、単元のめあてを確認し、相手の立場に立って山口市を紹介することを子どもたちと共有した。その上で、Wikipedia の瑠璃光寺五重塔のページに記されている文を提示し、瑠璃光寺五重塔を紹介するために必要な情報は何かを全体で話し合った。子どもたちは、瑠璃光寺が寺院であることや、五重塔が国宝であること、また、桜や梅の名所であることが紹介に必要な情報として挙げていった。続いて、先ほどの文を Google 翻訳にかけた英文を提示し、理解できるか問うた。子どもたちからは「難しい」という感想が出た。また、ALT も「自然な英文ではない」とこの英文を評価した。このように、Google 翻訳による自動翻訳のデメリットを授業前半で子どもは認識した。

授業後半では、単元のめあてに沿って、本時のめあて『どうすれば、自分たちが使える英語で伝えられるのかな?』を提示し、学級全体の話し合いで瑠璃光寺五重塔の紹介文を考える活動を行った。子どもたちは、「桜や梅の名所だから、有名ということ、だから It's famous for ~. が使える。」と既習の言語材料を用いて考えていった。このようにして、子どもたちは、伝えたい内容についてのアイデアを想起・整理し、そのアイデアを伝えるために必要な表現や視覚的資料を ICT を活用して検索した。その際、自分たちや聞き手が理解できるように、慣れ親しんでいる表現を工夫して伝えることができた。

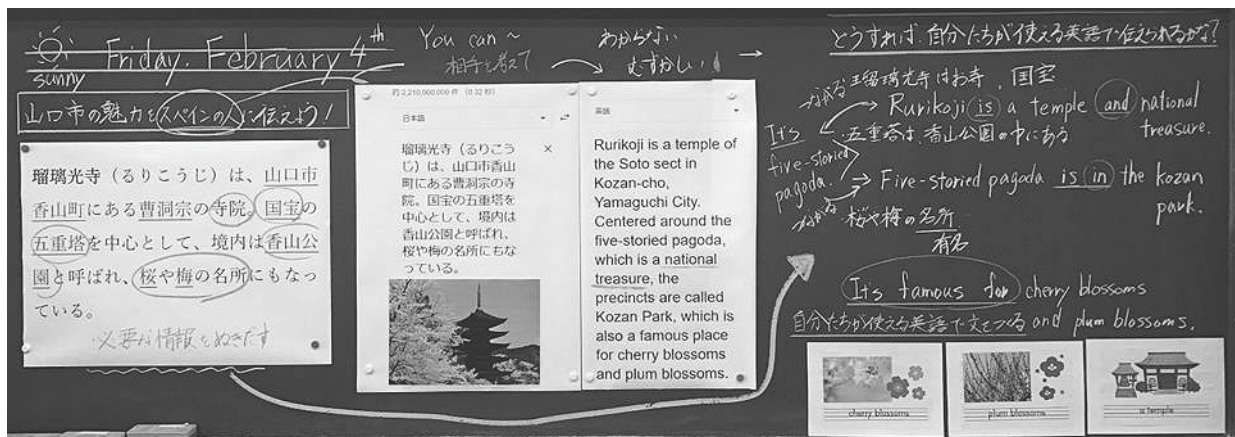


図 2 Google 翻訳を活用した授業の板書

2-2 中学校 1 年生での実践とその成果

(1) 授業実践 「聞き手意識のあるスピーチ ～自分で選んだ 1 枚の写真を通して～」

今年度の最後に、Our Project の「私が選んだ 1 枚」という教材を通して、「ALT とクラスの友達に対して、自分が選んだ 1 枚の写真について語る」というスピーチタスクを設定した。自分にとって思い入れのある写真を 1 枚選び、その背景にあるエピソードや思いを英語で伝えることを目標とし、授業を進めた。今回は ALT に原稿チェック等を依頼せず、あえてスピーチ本番まで聞かせない状況をつくった。そうすることで、ALT に英語で伝える必然性が生まれ、実際に伝わるかどうかが 1 つの指標となった。また、友達も聞き手であるため、同じ学習者にも伝わるような工夫を求めた。

単元の流れは次の通りである。(1) プロジェクトの説明、モデルスピーチの視聴、評価方法の共有 (2) 原稿作成 (3) スピーチ練習 (4) スピーチ本番の順で行い、写真の選定については冬休み中の課題とした。

評価については、(1) のガイダンスの時間に生徒と共有した。原稿については、①導入部の工夫 (問いかけ等)、②写真そのものの説明、③その写真を選んだ理由、④自分の思いや考え、⑤話題の一貫性の 5 つの観点を提示した。また、話し方 (Delivery Skills) として、①スピードとボリューム、②発音、③抑揚、④間の取り方、⑤表情やジェスチャーの 5 つの観点を提示した。いずれも指導の際には「どうすれば、聞き手にとってより良いものになるか」という点を繰り返し意識づけた。聞き手に語りかけることを目的にしているため、原稿を暗記し、聞き手の目を見て話せるような練習も行った。

発表本番は各クラス 2 時間ずつ確保した。1 人がスピーチを行い、そのスピーチに対しての質疑応答の時間を設定した。練習の成果もあり、多くの生徒が聞き手を意識したスピーチを披露することができた。質疑応答については「1 人 2 回」という数値目標を提示して進めていき、ほとんどの生徒が達成することができ

た。中には練習段階で耳にしたことがあるスピーチもあったのは事実だが、多くのスピーチは初めて聞く状態だった。その中で、即興的に英語で質問し、それに即興で応じるのは決して低くないハードルだったように思う。スピーチの内容に関連して、疑問詞を用いて質問したり、具体的に例示をしながら質問したりできる生徒もおり、文法的な誤りがありながらも、なんとか伝えようとする姿が見られた。質問を重ねる中で次第に質問の英語が洗練されていく生徒がいたのも印象的だった。

(2) ICT 活用場面

1) 写真の選定

1年生では、冬休みに iPad を自宅に持ち帰った。その際に、今回のタスクの概要をあらかじめ伝え、冬休み中に写真を選んでおくことを課題とした。Show & Tell 形式でスピーチをするにあたり、写真を手に持つのではなく、iPad のミラーリング機能で教室前方のモニターに映し出すため、自分の iPad に写真を入れておくよう指示を出した。実際に多くの生徒たちが、自宅にある昔の自分の写真や自分のスマホに入っている写真、スポーツ少年団でもらった記念品などを自分の iPad におさめてきた。中には訪れたことがある場所のより良い写真をウェブ上から探し出し、ダウンロードしてきた生徒もいた。冬休みというゆとりのある時間に、自宅という自分に関するものが豊富にそろっている場所を写真選びに使うことで、生徒にとってより自由度の高い選択が可能になったと考える。

2) 練習時における iPad の活用① (ボイスメモ)

ある程度スピーチ原稿が頭に入った段階で、ペアで練習を行った。シェアリングにもなり、互いにフィードバックをすることで、スピーチの改善につながった。しかし「もう少しゆっくりのほうが聞きやすい」と言われても、なかなか自分ではピンとこない生徒も多い。そこで、iPad に入っているボイスメモを活用した。生徒は iPad に対してスピーチを行い、ボイスメモで音声を録音した。ムービーでも音声は確認できるが、映像にすると音声以外の情報が気になってしまうと考え、あえてボイスメモに限定して使用させた。生徒は録音した音声を熱心に聞き、聞き手にとって、より聞きやすい話し方をめざして改善を図っていた。この活動を受けて、生徒からは「もう少し間を取りながらのほうが聞きやすいと思った」「自分のスピーチの中で特に強調したい語をもっとはっきり発音したほうが伝わりやすいと思った」などの感想が出てきた。

3) 練習時における iPad の活用② (ムービー)

音声の次のステップとして、自分が聞き手にどのように見えているかを確認するために iPad でムービーを撮り合う時間を設定した。3人1組で、1人がスピーチ、1人が聞き手、もう一人が撮影者となった。ペアでなく3人組にしたのは、聞き手の状態への配慮である。iPad を構えた撮影者ではなく、きちんと話し手の目を見て聞ける状態の人が聞き手のほうが、より本番に近い環境だと考えたからである。最初は映像を撮られることに抵抗がある様子を見せていたが、実際に始めると恥ずかしがることなくスピーチをやり切る姿が見られた。3人とも録画が終了したのち、それぞれが iPad で自分の音声と姿を真剣に確認していた。この活動を受けて、生徒からは「動画で撮影すると、人から言われるよりもはっきりと自分の様子がわかった」「本番は今日よりも堂々としゃべれるようにしたい」などの感想が出てきた。

4) スピーチ本番でのミラーリング

今回は自分で選んだ1枚の写真を、教室前方にあるモニターにミラーリングで提示することにした。冬休みのうちに、生徒各自の iPad に自分が選んだ写真が保存されており、本番前までの授業で教師の iPad に AirDrop で送信してもらった。そしてクラスごとにフォルダを作り、1か所にまとめておいた。スピーチ本番では教師の iPad をミラーリングし、順番が回ってきた生徒が各自で自分の写真をタップしてモニターに提示した。こうすることで、印刷する必要もなく、スムーズに大画面に自分が選んだ1枚の写真を提示することができた。



2-3 中学校2年生での実践とその成果

(1) 授業実践 「聞き手を意識したラジオ番組制作プロジェクト」

「若者のラジオ離れ」が加速し、メディアコンテンツが増えている時代だからこそ、「語り手の言葉」を意識できるのは、ラジオだと感じている。視覚的に情報をとらえられるテレビや SNS とは違い、ラジオは、

語り手の声だけで、話の想像を膨らませ、語り手の思考や経験を疑似体験できる。言葉と向き合える「ラジオ」に着目し、授業の一環として取り組めば、教師の指導のねらいと生徒のやりたいことが合致するのではないかと考えた。生徒が主体的に学習に取り組むためには、学習の目的がはっきりしていること、そして、活動のコンテンツが魅力的であることが必要となる。それらを踏まえ、今回は、ICTを活用した課題解決型・プロジェクト型の授業について、実践事例を紹介する。

プロジェクトで活用した手立ては、毎時間の帯学習で積み上げてきた「英問英答」や「即興でテーマに沿ったスキット」、「キーワードを示して即興で行うフリートーク」そして「テーマに沿ったディベート」である。これらを、年間を通して新出文法と組み合わせながら行ってきた。担当している学年では、3年生になる頃には、英語で5分間会話を続けられることを目標としている。しかし、会話においては、テーマやトピックを立てて会話するように指導しているが、話の盛り上がりには欠ける場面も目立ってきたり、生徒の意欲が低下している様子も見られたりした。そこで、教師に指示された「5分間話さないとならない活動」から、「5分間話したい活動」にすることに指導の重点を置いた。「5分間話したい活動」をしかけるため、ICTを活用し、生徒が学習してきた英語を引き出しながら、プロジェクト型の授業を最後の単元に組み込んだ。

(2) 授業の実際

プロジェクト型の授業として、「ラジオ番組を制作しよう」という学習課題で活動した。事前に、「ラジオをどれくらいの頻度で聞くのか」と尋ねたところ、クラスの4分の1はたまに聞き、大半がほとんど聞かないとのことだった。そこでラジオの魅力を伝える導入と、生徒が主体的に取り組みたいと思えるような導入をプレゼンテーションソフトで行った。以下は、「ラジオ番組を制作しよう」の導入である。

- ①ハワイで流れているFMを流す。
- ②アメリカ人YouTuberが製作した「ラジオ番組ができるまで」の特集を動画で流す。(生徒が、どのようにしてラジオ番組が制作されているかに視点をもたせるため)
- ③リスナー(級友)に楽しんでもらえるラジオ番組を作ることを目的とすることを伝える。
- ④番組制作の条件を示す。

条件

- ・約5分間(ボイスメモなど)
- ・台本を作ってはいけない
- ・即興で会話をひろげる
- ・リクエスト曲を流す(30秒)
(ペアで考えて)
(なぜその曲なのか理由も)
- ・テーマ(トピック)を決めて、二人で会話する。

例：最近の美味しかった晩ご飯の話・漫画
・会話の構成を考えておく

radio

ラジオ制作番組を視聴した。



⑤番組日程を示す。

打合せ→本番日程

- 1 ラジオ番組名を決定
- 2 話す内容【テーマ】決定
- 3 リクエスト曲決定
- 4 練習
- 5 録音(場所 多目的室)
- 6 梅本のiPadにAirDrop
- 7 友達のラジオを聞いて、ペアトーク



意欲的に活動行えるように、高性能のマイクや録音機能付きワイヤレスマイクを活用した。

番組を制作する過程で大切にすることは、「台本を作らないこと＝即興で会話をする事」である。そのための教師の手立てとして、年間を通して行ってきた「英問英答」や「即興でテーマに沿ったスキット」、「キーワードを示して即興で行うフリートーク」を活用させ、さらに、ラジオ番組制作に向けて、「テーマに沿ったディベート」練習を行ってきた。例えば、ラジオ番組でよく行われている、リスナーからメールや手紙を読む場面を「即興でテーマに沿ったスキット」から連想させた。テーマについてペアで自分の意見や感想を伝える活動は、何度も練習を重ねることで、試行錯誤しながらも話を続けられるようになってきた。この活動がラジオ番組制作にも役立つ場面が多かった。さらに、条件の中で、リクエスト曲をただ流すのではなく、「なぜその曲を流すのか」と流す理由を考えることを加えた。生徒は、リスナーのリクエスト曲に対する思いを想像して考えた。実際の会話は以下のとおりである。（原文ママ、すべて即興で会話）

A: We talk about a letter from listener.
 B: A letter from the radio name is Tom.
【Tomの手紙内容】
 I have a favorite anime. It's Tom and Jerry. I knew when I was three years old. I'm 31 years old. But I'm still watching it. Especially I like Tom and Jerry main theme. If you like, please play the song.
 A: Oh, I like Tom and Jerry, too.
 B: Me too.
 A: I like Tom because he is very... crazy....
 B: Hahaha.
 A: But cute.
 B: Yes! Let's listen.
【リクエスト曲 (Tom and Jerry の曲が流れる)】
 A: I like this song.
 B: Me too.
【Tom and Jerry の話題を皮切りに、音楽や映画の話が続く】

これまで、即興で会話する活動は、ペアとだけで会話が成立していたものの、今回は、聞いている人（リスナー）が楽しめるという視点で番組を作ることで、自分たちの趣味や興味のある話ではなく、聞き手を意識した内容を即興で考え会話する練習となった。また、「ラジオを聞いて、その内容について後で友達と会話する」ことを指示し、ラジオ制作者は、級友が自分たちのラジオについて会話している様子を見ながら、さらなる改善点を模索している姿があった。



好きな食べ物、お笑い芸人、北京オリンピック（羽生結弦選手の話）などたくさんの話題を提供している。

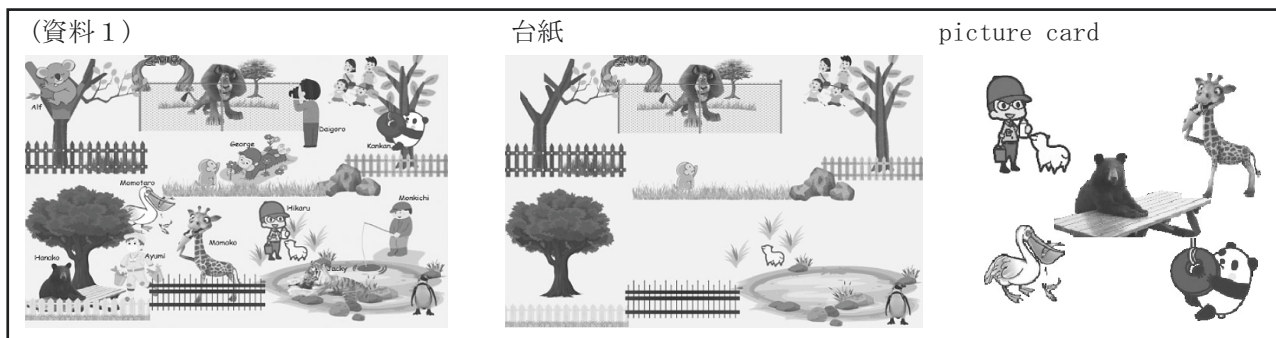
授業で歌った曲について語っている。



2-4 中学校3年生での実践とその成果

(1) 授業実践1：「Amazing Zoo」（架空の動物園）の様子を聞き手の立場に立って伝えるタスク

授業では、動物園の絵を見て、どこにどのような動物や人物がいるかを、即興で具体的に描写して伝える活動を行った。「Amazing Zoo」と名付けた架空の動物園の絵（資料1）を教室の前後4か所に掲示した。絵の中の動物や人物には、名前と、それぞれ異なる動きをつけ、現在分詞の後置修飾を用いて表現したくなる状況を設定した。生徒は、一人ずつ交代で絵を見に行き、その中の動物や人物についてできるだけ詳しく伝える。聞き役の生徒は、用意された動物や人物の picture cardの中から、説明の動きに合う動物を見つけ、台紙の適切な場所に置いて動物園を再現していった。



Ex) 聞き役:S1 伝える役:S2
 S1: Tell me about Hanako.
 (S2は絵を見に行く)
 S2: Hanako is a bear sleeping under the tree.

伝える役と聞き役の生徒は前半と後半で交代することとし、後半の活動の前にシェアリングを行った。まずは元の絵を公開し、答え合わせを行うことで、伝えづらかった点を明確にし、どのように言ってもらったら分かりやすかったか、絵を完成させた生徒と話し合わせた。その中で、「同じ種類の動物が2匹いて、どっちなのかわからない時には「～している・・・」にあてはめて、詳しくかつ簡潔に伝えたらよかった。」という意見が出された。そこで、右のスライドをPPTで提示し、分詞の後置修飾を効果的に使うことで、限られた時間でより伝わりやすくなることを全体で共有し、後半の活動へとつなげた。

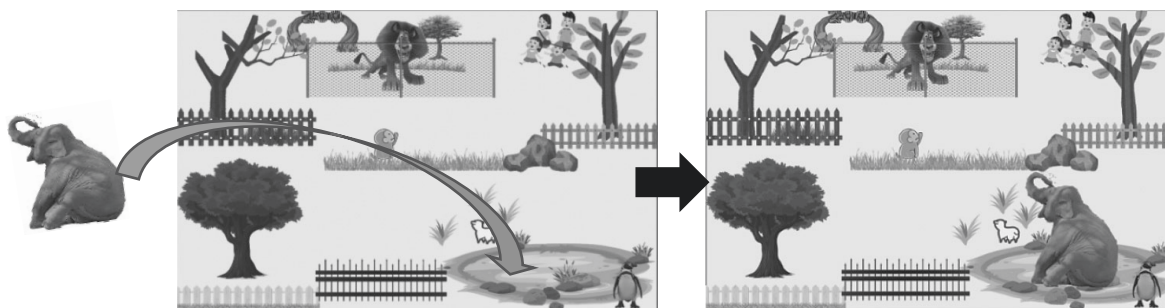


活動の前半では、生徒たちは伝えることに必死になるあまり、単語の羅列になったり、思わず指をさしてカードを示してしまったりする姿が多かった。その後にシェアリングをすることで、自分の伝え方を客観的に振り返ることができ、また聞き役の子供にどのような場面で困ったかを尋ねることで、伝え方の課題が見えてきた。本授業でのシェアリングを通して、「自分自身の取り組み方」や「よりよい表現」に気づくことができ、その後の再チャレンジでは、その気づきを生かしながら「もっと詳しく」「すっきり簡潔に」「相手に分かりやすく」伝えようと試行錯誤する姿が見られた。同時に、必要な情報を一文で詳しくかつ端的に伝えるためには分詞の後置修飾が最適であることに気づいた生徒も多くいた。

(2) ICT 活用場面

パワーポイントのアニメーションで動きのある絵を提示することで、活動の手順を視覚的に分かりやすくした。その結果、活動のルールや picture card の置き方について、日本語を介することなく英語で理解し、スムーズに活動に移ることができた。

Ex) Tonky is an elephant sitting in the pond.



(3) 授業実践2 「Movie Talk (動画を見て、即興で内容を実況中継するタスク)」

授業実践2では、Mr. Bean の短い動画を見て、即興で生徒に伝える内容を考えさせ、実況中継をさせるタスクを行った。その際、使用した動画は、伝えたい内容を含むが、ただ動画を見るだけでは面白さが伝わらない動画を選択した。実際に授業で使用した動画は以下の2つである。

動画 A : Mr. Bean “Fast Food”

＜あらすじ＞ビュッフェ形式のレストランにやってきた Mr. Bean。列の前に並んでいる男性に対抗心を燃やしてたくさんの料理を皿に盛り、意気揚々と食べ始めるが、欲張って取った牡蠣が実は傷んでおり…。

動画 B : Mr. Bean “Christmas Day!”

＜あらすじ＞クリスマスの朝に目覚めた Mr. Bean。喜び勇んで、靴下の中のプレゼントをあらためる。ガールフレンドをディナーに招待し、プレゼント交換をすることになる。大きな船のプラモデルをもらってご満悦の Mr. Bean。一方で彼がガールフレンドに贈ったプレゼントは「指輪をプレゼントされて嬉しそうな女性の写真パネル」。へそを曲げる彼女に Mr. Bean が渡したもう一つのプレゼントとは…。

実況中継は2回行った。1回目は、教室のモニターを使い動画を流した。4人グループを2人ずつのペアに分け、動画Aを実況する人、動画Bを実況する人とした。前回の動物園の絵を説明するよりもさらに即興性が高く、場面が次から次へと移っていくため、生徒たちにとってはかなりの challenging な活動となった。そのため、1回目は、単語を必死に並べたり、ジェスチャーに頼ったりする生徒が多く、四苦八苦しなうながら何とか伝えようと挑戦していた。そこで、同じ動画の実況を担当した生徒同士で、「ここを伝えなかった」「英語で何と言ったらよかったです」「この面白さを何とか伝えたい」という思いを共有し、グループに分かれて実況中継のシナリオを作る活動を仕組んだ。この協働学習では、英語の語彙や表現の仕方について考えるだけでなく、劇中の文化的背景などについて関心や疑問をもち、タブレットの検索機能を使って調べるなど、多角的な視点で動画をくり返し見直している様子が見られた。2回目は、各自が最も伝えたい場面を抽出し、タブレットでペアの相手にそのシーンを見せながら、グループで考えたシナリオを参考にしながら、実況に再挑戦した。伝える側の生徒は、1回目よりも語彙や表現が増え、具体的に状況や場面を伝えられたという達成感を得ることができた。聞き手も「なるほど。そういうことか。」と1回目よりも納得でき、面白さやオチに気づいたり、ストーリーをさらに知るために質問をしたりする姿が見られた。



3. プロジェクトの評価

3-1 小学校での実践に関する評価と今後の課題

今回の実践で行ったように、Teacher's Talk を動画にすることによって教材化し、子どもたち自身が自分で学びたいタイミングで学ぶことが可能な教材とすることが可能となった。外国語科における自己調整学習や自由進度学習へとつながる取り組みになったと考えられる。また、Google 翻訳という利便性のあるツールも、子どもたちの学習を促進する教材に変化し得ることを確認することができた。教材を開発していくという教師の資質には、外国語教育において、何を教材として見るかという観点が必要であることが本実践を通して示されたと考えられる。一般的に、言語材料として示されている文字に表記された外国語やそこから体系的に整理された文法などを教材として捉えがちだが、実際は、外国語による目的・場面・状況に応じたやり取りや発表そのものも教材として捉えることが可能だと考えられる。今回の実践をもとに、どのように文構造や言語の働きなどの知識・技能を体得させていくかという点に加え、ICT を活用し、外国語のコミュニケーションにおける見方・考え方を、どのように働かせて子どもたち一人ひとりに今後の世の中に必要となる知識や技能を身につけさせていくかについて研究を深めていくことが今後の課題である。

3-2 中学校1年生の実践に関する評価と今後の課題

ICT の大きなメリットの1つに、個々のペースで学習が進められるという点が挙げられる。その生徒のニーズに応じて、何度も録音でき、何度も再生することができる。自宅に持ち帰れば、授業時間という時間的制約からも解放され、自分のペースで学習を進めることができる。そして、自己を客観視するのも適している。音声や動画を自分で確認することで、めざす姿とのギャップを客観的に捉えることができ、改善に役立つと考える。さらに、音声や動画を蓄積していけば、成長の過程を振り返って確認することも可能になる。特に、

Writingでのアウトプットとは異なり、Speakingでのアウトプットは手元に資料が残らず、過去の自分との比較が困難であった。しかし、自分のiPad内にやりとりやスピーチの音声や動画が残っていれば、容易に振り返ることができる。成長を自覚できると自信につながるのではないかと考える。

一方で、Speakingでのアウトプットの蓄積を定期的に行う必要があり、そのために見通しのある計画が必要になる。プロジェクトの時だけでなく、定期的にそのような課題を出すことで、成長の過程を記録したい。それをGoogle Classroomで提出し、評価資料としても使うようなサイクルが確立できれば理想的だと考える。また、その際に、マイクを日常的に使う習慣をつくと、より質の高い音声が残せるはずである。さらには、生徒一人ひとりに個人のイヤホンを持参させ、音声や録画を聞くときに、自分の音だけに集中できる環境を整えたい。イヤホンは、今後個人のiPadにデジタル教科書が導入され、教科書本文の音源を聞く際にも役立つと考えられる。

3-3 中学校2年生の実践に関する評価の今後の課題

ラジオ番組制作というタスクは、教師の予想を上回るほど生徒は意欲的かつ主体的に行った。ペア活動を観察していると、タブレットを使って英語の言い回しや会話のネタとなる情報を積極的に調べたり、録音前には何度も練習をしたりした。本来なら、本番までに何を準備し、どれくらい練習が必要かを教師が示す必要があったが、それらが要らないほど生徒は自ら準備をし、何度も練習を行った。生徒の感想は、以下のとおりである。

- ・今まででの授業で一番楽しかった。すべての活動が一瞬で終わった感じがした。あと3時間は活動時間がほしいと思えるくらいだった。
- ・会話が詰まりながらもなんとか話すことができた。相手の話すことにすぐ反応しなければ番組が成立しないと思うと5分間ずっと緊張していたが、リスナーのために頑張れた。
- ・いつもは、リスナーだけの立場だったが、今回の授業で番組の構成を考えたことで、リスナーのことを考えた会話や内容を作る意識ができて、良い経験になった。

今後は、生徒が制作したラジオ番組を授業の帯学習の一環で流し、それについてペアトークなどを行えば、Small Talkがより一層充実したものになるのではないかと考えている。今後の課題として、ICTを活用して、計画的に、生徒のスピーキングのパフォーマンスデータを蓄積し、電子ポートフォリオとして活用することにより、振り返りやパフォーマンス評価に活かすことを検討したい。また、そのことによって、生徒自らが自分の英語能力の成長を確認して自己効能感を高めたり、今後の課題や次の目標を確認することができるように支援したい。また、今回は、聞き手の興味や関心を引きつける会話の内容や展開についての工夫を取り上げたが、論理的で説得力のある会話についても指導を継続していきたい。

3-4 中学校3年生の実践に関する評価と今後の課題

生徒一人ひとりのタブレットにAirDropで動画を送り共有した。これによって、対象の動画を検索して探す手間が省け、また、他の動画に気を取られることがなかった。何より、見返したいシーンを各々のペースでくり返しリピートでき、生徒自身が主体的に取り組むことができた。また、オチや面白さを聞き手と共有したくなるような内容の動画を設定することで「このシーンを何とかして伝えたい」「登場人物の意図することは何だろう」など、生徒一人ひとりが伝えたいことを見つけ、英語を用いて表現しようとするモチベーションが上がり、英語を使って伝えることや課題解決への内発的動機付けにつながったと考えられる。また、GoogleのJamboardやロイロノートなどを使えば、生徒一人ひとりや、協働学習のグループでつくった英文を共有することができ、意見の整理や交換などのシェアリングもスムーズに行うことができる。今後の授業実践にこれらを取り入れ、より自立的で創造的な学習を進めていきたい。

おわりに

今回のプロジェクトにおいて、プロジェクト型・課題解決型の教育を実施する上で、どのような点においてICTが活用できるかについて検討した。

小学校では、Google翻訳、等の機能を使うことで、自分達自身の力で表現したいことをどのように表現

すれば良いかを知ることができた。ただし、そのようにして知った表現は、自分達の能力レベルを超えたもので、聞き手にとってもわかりにくい表現となるため、クラス全体で振り返りや協議をしながら、自分達が知っている表現で工夫すれば同じ内容を伝えることができることを学んだ。これまでは、語彙や表現の制限から伝えたいと思っても表現できないと諦めていた内容も、工夫すれば伝えられることを発見した貴重な体験となったと考えられる。

中学校1年の実践では、Show & Tell 形式で、自分にとって思い入れのある写真とその理由を説明し、その後、即興で質問を受ける課題を設定した。その際、発表の様子を撮影されることにより、また、撮影した音声と映像を振り返ることによって、間を置いたり、重要な語句を強調したりすることによって、メッセージが聞き手にとって、聞き取りやすく、伝わりやすい話し方になることを認識することができた。

中学校2年の実践では、ラジオ放送を担当するという課題を設定することにより、話題をどのように展開していくのか、どのような曲を流すのか、それはなぜかということを経験的に考えて言語を使用する場を持った。ICTを活用することにより、現実世界の「ラジオ放送」に近い舞台装置を作り出すことにより、これまで普通の授業で行って来た「英問英答」「フリートーク」「テーマに沿ったディベート」などによって培って来た力を総合的に、そして、創造的に使う機会になった。

中学校3年の実践では、現在分詞の形容詞的用法の言語機能 (USE) に焦点を当てた jigsaw task タイプの活動に加え、Mr. Bean の面白い動画クリップの内容を伝えるという課題に取り組んだ。動画の内容は面白いが、そのままでは面白みが伝わらない。生徒が伝えたいと思う内容はあるが、どう伝えたらよいかは生徒が考えなければならない。実況中継なので、映像の流れに合わせる必要があり、また、文化的な背景も伝えないと面白みが伝わらない。そのため、表現や文化的な背景に関する情報の収集・整理も必要となる。一度、実況中継を経験した後、同じ動画クリップの実況を担当した生徒同士がグループで集まり、どのような情報をどのような表現でどのように伝える必要があるのかを振り返り、協議した。そのことにより、2回目では、表現と内容の両方が改善され、動画クリップの面白さやオチを聞き手によりわかりやすく伝えることができた。

今回のプロジェクトでは、パンプローナ市に紹介する動画作成やラジオ番組作成など、現実世界の課題に近い、「本物」のプロジェクトを教室で取り組んだ。音声や動画の記録・再生、動画や画像の共有、PPT による効果的な教材提示など、ICT 活用による学習の支援を工夫した。さらに、児童や学生が互いに協議したり、振り返る機会を多く取り、「協働」や「討論」によって思考や学習を広げ、深めることができたようにした。

今回の実践では、ICT を活用した問題解決能力、(児童・生徒の) 主導性、創造性、協力能力、コミュニケーションといった資質・能力の養成については扱うことができたが、批判的な能力の養成、児童や生徒のアイデアや振り返りを分析、整理、共有すること、言語活動やパフォーマンスの評価等における ICT の活用については、本プロジェクトでは扱うことができなかったのが今後の課題として、継続的に取り組みたい。

参考文献

文部科学省 (2017) : 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック 授業研究編2 外国語』

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_2.pdf
(2021年8月5日最終閲覧)

文部科学省 (2018) : 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語活動・外国語編』

文部科学省 (2018) : 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 外国語編』

付記

小学校の授業は2022年の1月25日(火)・2月4日(金)に実施、中学校1年生～3年生の授業は、それぞれ2022年2月28日(月)・3月1日(火)、2月24日(木)、2月25日(金)に実施したものです。